

ニホンザル野外観察施設

加納隆至(施設長・兼)・
東 滋・渡邊邦夫・足沢貞成¹⁾・
山口直嗣²⁾・冠地富士夫²⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、鈴木 晃・山極寿一によって進められた。平成3年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以来の蓄積された資料をもとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度は春から夏にかけて、原因不明の病気が流行し、老年個体を中心に多数が死亡した。また出産はわずか1頭のみであった。症状は特に目立ったものはなく、突然に衰弱して死にいたるものであった。死亡個体の中には、メスガシラであったウメヤその姉のウリ、高順位のクルミなどが含まれており、群れの構成は大きく変化した。特に、1972年以前の餌を多く与えていた頃に数多く生まれた個体が少なくなり、全体に若い個体が多くなっている。今年も春から夏にかけて、島が堆積した砂によって地続きになり、サル番を出す日があった。秋に台風がきてこの状態は解消されたが、幸島対岸に舟溜りができて以来、台風がきて砂が流されにくくなっており、来年度もこの状態は続くであろう。また舟渡し業者の増加に伴う観光客の増加も、研究条件の悪化を招いており、今後の対策が必要になろう。地元では、財団法人「幸島自然保護センター」の構想があり、元非常勤講師の三戸サツエを中心に募金活動が行われている。保護のための啓蒙活動とともに、地域の活性化を目指した文化活動がこの構想の内容であり、今後の展開が注目される。また、宮崎県は独自に「ビジターセンター」の設置を決定しており、研究条件の維持のため、一層の努力が必要になろう。幸島のニホンザルは、現在小中学校の教科書にとりあげられており、各地の小中学校児童から種々の問い合わせや書簡が送られてくる。そうした問い合わせにこたえるため、ニホンザルの生態を中心に分かりやすく説明したパンフレットの作成を行った。平成4年3月の時点での島内の個体数はマキグループ13頭を含め90頭である。

2. 下北研究林

平成3年度冬の調査は、材木川から目滝、易国間川までの範囲にいるはずのM群とAr群の動態を洗った。しかし22頭の集団と37頭を見つけたのみに終わった。平成3年5月5日に55頭のM群を数えており、上記の2集団がM群の分派群同志であるのか、あるいは22頭の集団がAr群であるのかは、これだけでは判別できない。雪の条件も良く皆広く歩きまわったのだが、あっていいはずのもう1集団は発見できずじまいだった。野生群調査の難しさを感じた調査であった。

初夏以降、佐井村、古佐井川流域のZ群の分裂群(Z1)が下流の山脚部の耕地を荒らし始めた。

接近予知のために、テレメータ装着、トウガラシエキスのスプレーによる忌避効果などの被害防除策の準備に入ったが、10月初頭には群れは現れなくなった。山の果実類が実り始めたことが利いている。

青森県河川課によって、奥戸川に多目的ダムを建設する計画がもちあがった。目的は、地元大間町の上水道計画(電源開発 K.Kが計画中の大間ATR用の工水の上水へのふりかえを含む)および洪水調節と伝えられる。平成3年度は予備調査の2年次として環境影響評価のための調査が始まっている。評価手続きの一環として、サル問題に関する委員会が設けられた(委員長:奈良典明, 委員:森治, 東滋, 足沢貞成)。

ダム軸の位置を約1.5km下流へ移すことは検討されているが、それでもダムの水面が奥戸川に生息する2群の冬の中核行動域にかかるなど、様々なマイナスの影響が予測される。環境影響評価制度の運用のされ方をも含めて、対応に苦慮している。

3. 上信越研究林

横湯川流域において、Seed Trapに入る果実量とその樹種毎の樹高・胸高直径分布から真の果実生産量を推定する作業を、10年間にわたって行ってきたが、このほどそのまとめを論文として発表した(和田一雄(東京農工大), 小見山章(岐大))。

雑魚川流域の調査も続行されたが、本年度は群れの所在を発見することができなかった。ここ10年の環境変化のもとで行動域に大きな変化がおこった可能性がある。

4. 木曽研究林

木曽研究林における調査は、昭和45年に始められ、特に昭和56年以降はより実質的な調査が行わ

1) 教務補佐員

2) 文部技官

れてきた。しかし、それと相前後するように、この地域の群れが猿害をおこすようになり、昭和57年以降断続的に集団捕獲が行われている。平成2年にも研究林地域南部のS群が30頭ほど捕獲された。このような事情から、この研究林における調査研究は、猿害を起こすにいたる周辺状況と対策、より山奥へ追い返すための方法、集団捕獲のもたらず地域集団への影響評価などを中心に行われてきた。今年度も、この地域の個体群に関する調査が行われたが、度重なる集団捕獲にもかかわらず、以前と同じ群れがなお生息していることが確認されている。また、依然としてこれまでニホンザルが姿を見せなかった地域への新たな進出が続いており、ひいてはそれが周辺地域での畑地への出没、猿害発生へと結びついていることが指摘された。このようなことは現在全国各地で起こっていることであり、問題の解明と実効のある対策とが、ニホンザル保護のためには是非とも必要である。特に、従来からの天然林域に生息している群れと、猿害を起こしている群れとの関連を見定めることは最も肝要なことであろう。しかしながら、継続調査は次第に困難さを増しており、この研究林の見直しや他地域への移転も検討されはじめています。

5. 屋久島研究林

共同利用研究で、古市剛史が「ニホンザルのオスの集団間移籍と生活史」についての研究をおこなった。

2年間続いたWWF Jの補助事業「屋久島におけるサルと人との共存のための努力」は、本年度をもって終了した。

前岳の照葉樹林帯での植生の回復についての調査を昨年度からはじめ、今年度も継続した。

2次林のプロット(20m×20mおよび20m×30m)をもうけリタートラップによる果実生産量の測定を始めた。

今年度から県道永田～栗生線の残り8km区間の予備設計および環境影響評価が始まった(らしい)。モニタリング調査の結果がどのように参照され反映されるかについては、今のところまだ手続きとしては決まっていない。

NACS-Jから、「ヤクザルの野生生物管理のための基礎的研究」に対して補助金をえて、上部域の群れの生態調査をおこなう予定は、捕獲・テレメータ装着がうまくゆかず環境収容力の調査にきりかえた。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡邊邦夫・山口直嗣・冠地富士男

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析をすすめている。

2) スラウェシマカクの種分化及び社会生態に関する研究

渡邊邦夫

インドネシアのスラウェシ島において、ムーアモンキーを個体識別した上で、個体関係の分析を続けている。さらにムーアモンキーとの比較のため、ハルマヘラのバチャン島で移入されたと思われるクロザルの調査を行なった。また、ヘックモンキーとトンキアンマカクの間、トンキアンマカクとブーツモンキーの間でみられる種間雑種についての調査を行った。

3) 全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

渡邊邦夫

全国の野生ニホンザルについてのこれまで個別になされてきた調査報告類を中心に、ニホンザルの個体数や歴史的変遷を、系統だった資料として使用できるようにするため、データベース化する作業が進められた。

4) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、生存に必要な条件をあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

5) 下北半島西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM、I、Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

6) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係、個体群構造、資源利用などに関して比較社会

生態学研究を行い、community 構造のなりたちを考える。

論文

- 1) Watanabe, K. and Mori, A. (1991) : Prolonged effects of developmental retardation on the prospective reproduction concerning to food-shortage observed in Japanese macaques on Koshima Island. In : Primatology Today (eds. by Ehara, A., Kimura, T., Takenaka, O., and Iwamoto, M.) , pp. 393-396, Elsevier Science Publishers, Amsterdam.
- 2) Watanabe, K. and Matsumura, S. (1991): The borderland and possible hybrids between three species of macaques, *M. nigra*, *M. nigrescens*, and *M. hecki*, in the northern peninsula of Sulawesi. Primates, 32 : 365-369.
- 3) Watanabe, K., Matsumura, S., Watanabe, T., and Hamada, Y. (1991) : Distribution and possible intergradation between *M. tonkeana* and *M. ochreata* at the borderland of the species in Sulawesi. Primates, 32 : 385-389.
- 4) Watanabe, K. and Mori, A., and Kawai, M. (1992) : Characteristic features of the reproduction of Koshima monkeys, *Macaca fuscata* : a summary of thirty-four years of observation. Primates, 33 : 1-32.

報告・その他

- 1) 東 滋 (1991) : サルの世界・大畑川の冬。グリーンパワー, 1月号。
- 2) 東 滋 (1991) : サルの世界・奥戸川の2つの群れ。グリーンパワー, 2月号。
- 3) 東 滋 (1991) : サルの世界・さまよえる群れ。グリーンパワー, 3月号。
- 4) 東 滋 (1991) : 国割岳西斜面のヤクザル個体群の地域構造。1991年度西部林道モニタリング調査サル班報告。
- 5) 東 滋 (1991) : 種の保存。東奥日報, 91.12.12.
- 6) 渡邊邦夫 (1991) : サル。「インドネシアの

事典」, pp. 189-190.

- 7) 渡邊邦夫 (1991) : ニホンザル保護をめぐる最近の問題点—久しぶりに開かれた「ニホンザルの現況」研究会から。霊長類研究, 7 : 53-54.
- 8) 渡邊邦夫 (1991) : 霊長類における学習と文化。週間朝日百科「動物たちの地球」, 1 : 314-319.
- 9) 渡邊邦夫 (1991) : 野生ニホンザルにみる利き手。左右差の起源と脳 (久保田競編), p. 49-62. 朝倉書店。

学会発表

- 1) 渡邊邦夫 (1991) : スラウェシマカクの現状と保護について。第7回日本霊長類学会大会。霊長類研究, 7 (2) : 155.
- 2) 井上美穂・大沢秀行・渡邊邦夫・竹中 修 (1991) : DNAフィンガープリント法による父子判定の、野生霊長類への応用。第7回日本霊長類学会大会。霊長類研究, 7 (2) : 144.

サル類保健飼育管理施設

小嶋祥三 (施設長・兼)・松林清明・後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

平成3年度の活動を以下に述べる。

1) 営繕工事の要求が認められて、第2放場に飼チンパンジー用のテスト室および居室が増設された。これは本棟地下で飼育されていた2頭のチンパンジーが成長し、第2放飼場に移動したことに伴う処置である。今後第1、第2放飼場の次段階の改修を順次要求する予定である。

2) サルを含む動物の実験使用については、動物福祉の観点から、きめ細かな配慮が要求されるようになってきている。そのような状況に対応し、サル類の飼育や繁殖の改善を目指して、当施設を改組、拡充するセンター化の構想が計画された。これについては現在進行している研究所 (部門) の改組が決着した後には要求する予定である。それに関連して、自家繁殖体制をほぼ確立した現時点での適正飼育頭数やサルの所外供給に関わる諸問

- 1) 教務職員